

# 下佐野第一公民館旧蔵の考古資料について

埋蔵文化財担当1 学芸員 櫻井 条

## 1 はじめに

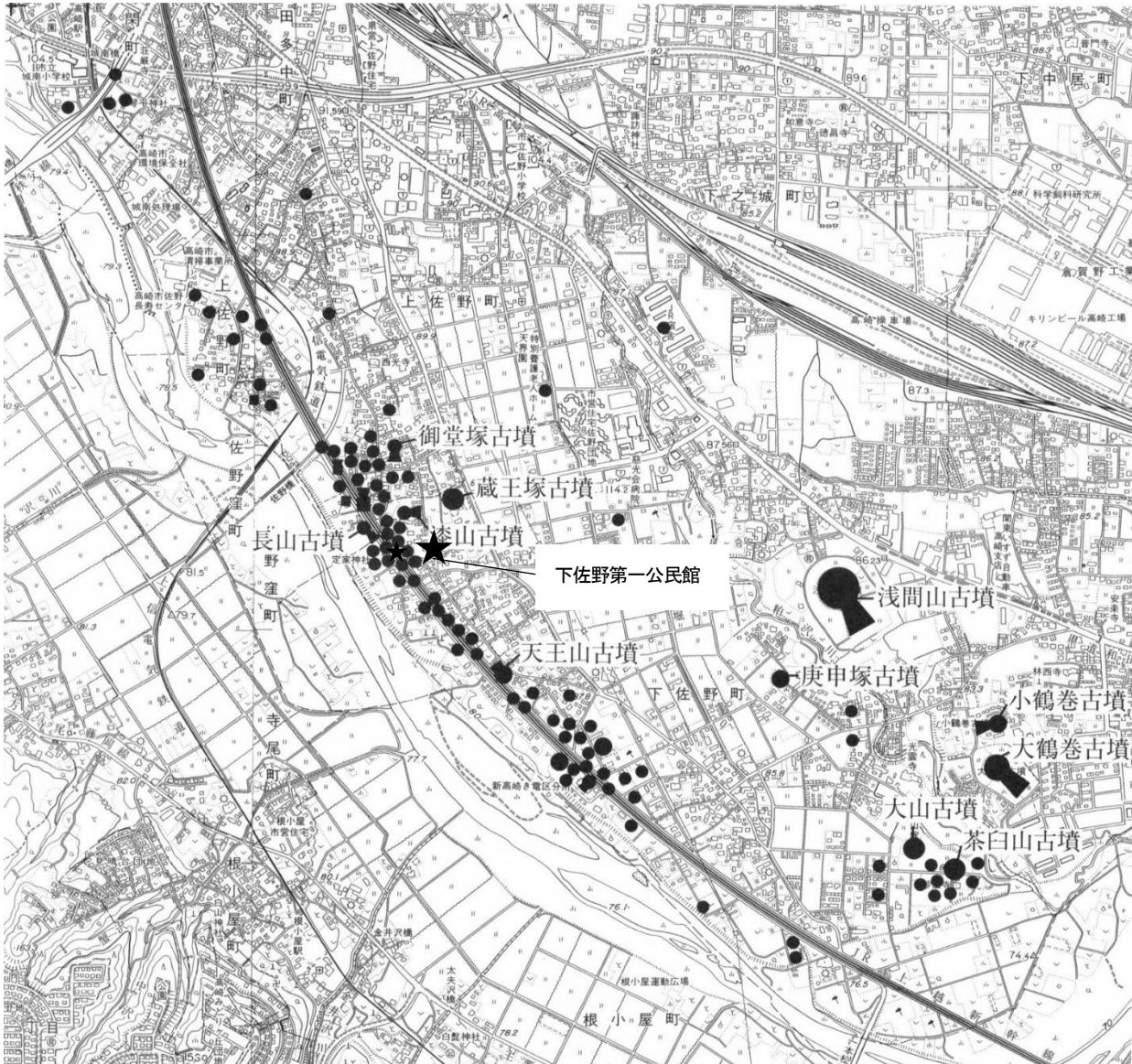
2024年（令和6）の8月、筆者は群馬県高崎市下佐野第一公民館に保管されていた考古資料を調査する機会に恵まれた。未公表資料だったため、整理・調査を実施し、本稿で報告する。

なお、これらの資料は現在、かみつけの里博物館に移管されているため「佐野第一公民館旧蔵資料」と表記する。

## 2 資料の概要

下佐野第一公民館(以下、公民館)は、群馬県

高崎市下佐野町字蔵王塚845番地1に所在している。当地は、烏川左岸の河岸段丘上に位置し、下佐野町に加えて上佐野町も含めた一帯は、80基あまりの古墳が確認されている佐野古墳群として把握されている（図1）。また佐野地域一帯は、6世紀後半にヤマト王権によって置かれた佐野屯倉の推定地でもあり、中でも最大の前方後円墳である漆山古墳には佐野屯倉の管理者であった豪族が埋葬されたと考えられている。



公民館が建つ地は、佐野屯倉勢力が建てた山上碑に書かれている放光寺の推定地でもあります（現在は、「放光寺」瓦が出土した群馬県前橋市総社町の山王廃寺跡が放光寺であるとする説が有力）、放光寺・放光明神址碑や放光神社が所在する。1818年（文政元年）成立の『古京遺文』には、正しいかは定かでないと断った上で、佐野村の小堂を放光山顛辺寺と呼ぶとの記述が見える（註2）。

公民館に所蔵されていた資料は、金銅装大刀1振（大刀、六窓鍔、鞘装具）、銹着した3振の大刀片、十文字槍である。資料は木製の台板に固定されており、「當山放光寺趾ニテ公民館建設ノ折 発掘セルモノナリ 昭和二十五年寅歳春」と墨書きされていた（写真1）。

### 3 資料の詳細（表1、図2、写真2・3）

大刀は、大刀本体（図2-1、写真2-1）の他に、組み合うと考えられる六窓鍔（図2-2、写真2-2）、金銅製鞘装具（図2-3～6、写真2-3～6）の一部が残っている。大刀は両関で金銅製鍔 金具が嵌っており、茎には目釘が1本残存している。刀身は関部を境にやや右に屈曲している。大刀の佩裏には、鍔に隣接した位置に鞘の部材と考えられる木質が残存する。刀身半ばには、木質は残っていないが鞘の部材の木質の模様が鋳に転写されていた。六窓鍔は、大型の倒卵形を呈す。材質は、金銅で金が良く残存している。鍔は窓の一部から破断し、やや歪んでいる。金銅製鞘装具は、4つの破片に分かれ。また弧の中央から押し



写真1 下佐野第一公民館旧蔵資料と台板（筆者撮影）

表1 下佐野第一公民館旧蔵資料 観察表（筆者計測）

掲載番号	種別	名称	計測値(cm)	備考
1	鉄・金銅	大刀	全長63.3 刃部長53.9 茎長9.4 茎尻幅1.2 刃部幅0.2切 先背幅0.9 根本背幅2	鞘尻に直径0.5cmの目釘 残存、鍔が金銅製
2	金銅	六窓鍔	全長7.8 最大幅6.4 厚0.2 縁部厚0.3	
3	金銅	鞘装具	全長10.4 最大幅3.4 厚0.1	
4	金銅	鞘装具	全長6.4 最大幅3.9 厚0.1	
5	金銅	鞘装具	全長4.1 最大幅3.5 厚0.1	
6	金銅	鞘装具	全長4.1 最大幅3.5 厚0.1	
7	鉄	大刀片	全長14 最大幅4.4 大刀片厚左:0.3 中央:0.4 右:0.4 (上から)	鋳に丸石を巻き込む
8	鉄	十文字槍	全長50.9 刃部長16 茎長34.9 刃部最大幅9.1	

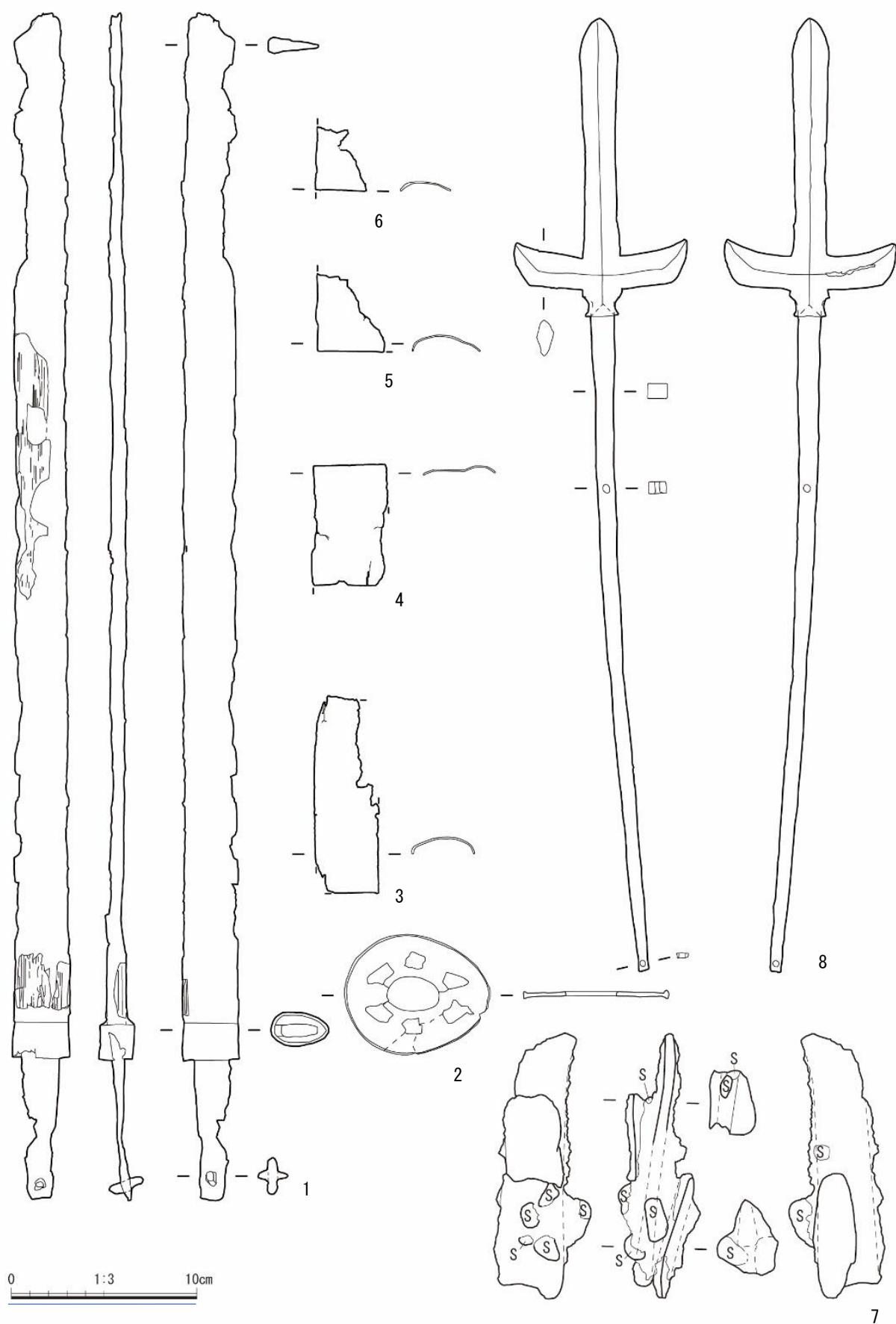


図2 下佐野第一公民館旧蔵資料 実測図 (S=1/3) (筆者作成)

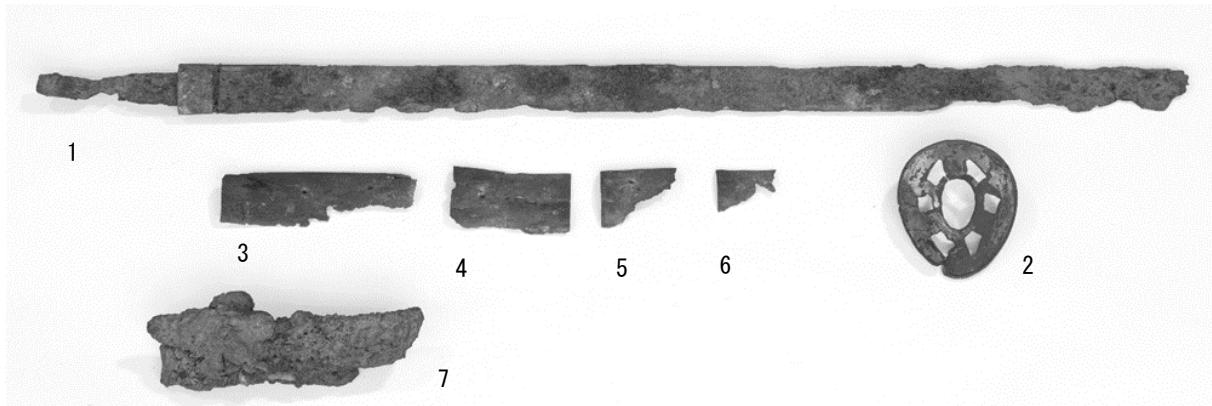


写真2 金銅装大刀と大刀片（筆者撮影）



写真3 十文字槍（筆者撮影）

つぶされるように変形してしまっている。

大刀片（図2-7、写真2-7）は、3振分の大刀片が銹着し一塊となったものである。中央の破片は、大刀の切先部である。装飾や鞘の痕跡などは見られない。鎧には、多量の砂や複数の丸石が取り込まれている点は、出土状況を推測する根拠となるため、今回は鎧を除去せずに図化した。

十文字槍（図2-8、写真2-8）は、大刀や大刀片とは時期が異なるが、出土品として一括で取り扱われているため掲載した。やや小ぶりで江戸時代に属するものと考えられる。

#### 4 出土地についての考察

資料の出土地とされ、現在は公民館が建っている下佐野町字蔵王塚845番地1について考察を行う。

まず下佐野町字蔵王塚845番地1の放光寺址としての認識は、1818年（文政元年）成立の『古京遺文』の「放光寺不詳、按上野国神名帳有群馬郡放光明神、寺或在是地、然神祠亦廢不レ知其処、今距佐野村、一詳町有小堂一字、俗呼云放光山顛辺寺、或云、是放光寺旧趾、未レ知果然否」（註2から引用）との

記述に遡ることができる。放光寺・放光明神址碑、放光神社が現在の公民館の敷地に建っていることから『古京遺文』に登場する「放光山顛辺寺」や「放光寺旧趾」が公民館の敷地を指している可能性が高い。

次に当地を古墳として記述している文献として、相川龍雄氏の1937年（昭和12）の論考があり、

「②放光寺に就いては文献もなく口碑に群馬郡佐野村定家神社附近に放光山天平寺址があるが、調べたところ圓墳であつた。」（註3から引用 P. 574 L. 2-3）との記述がある。

さらに、今回報告した資料が固定されていた台板に墨書きされた「當山放光寺趾ニテ公民館建設ノ折 発掘セルモノナリ 昭和二十五年寅歳春」という内容について、1950年（昭和25）は公民館（下佐野新堀公民館）建設時期と合致する（註4）。

加えて、公民館および放光神社が所在する土地は、現在でも周囲より約0.8～1m程度高い微高地となっている。しかし、古墳の分布が悉皆的にまとめられた上毛古墳綜覧（註5）、群馬県古墳総覧（註6）、高崎市史（註1）では、古墳として把握されていない。

上述の情報を総合するに、公民館が建っている土地は総覧漏れの古墳である可能性が高い。

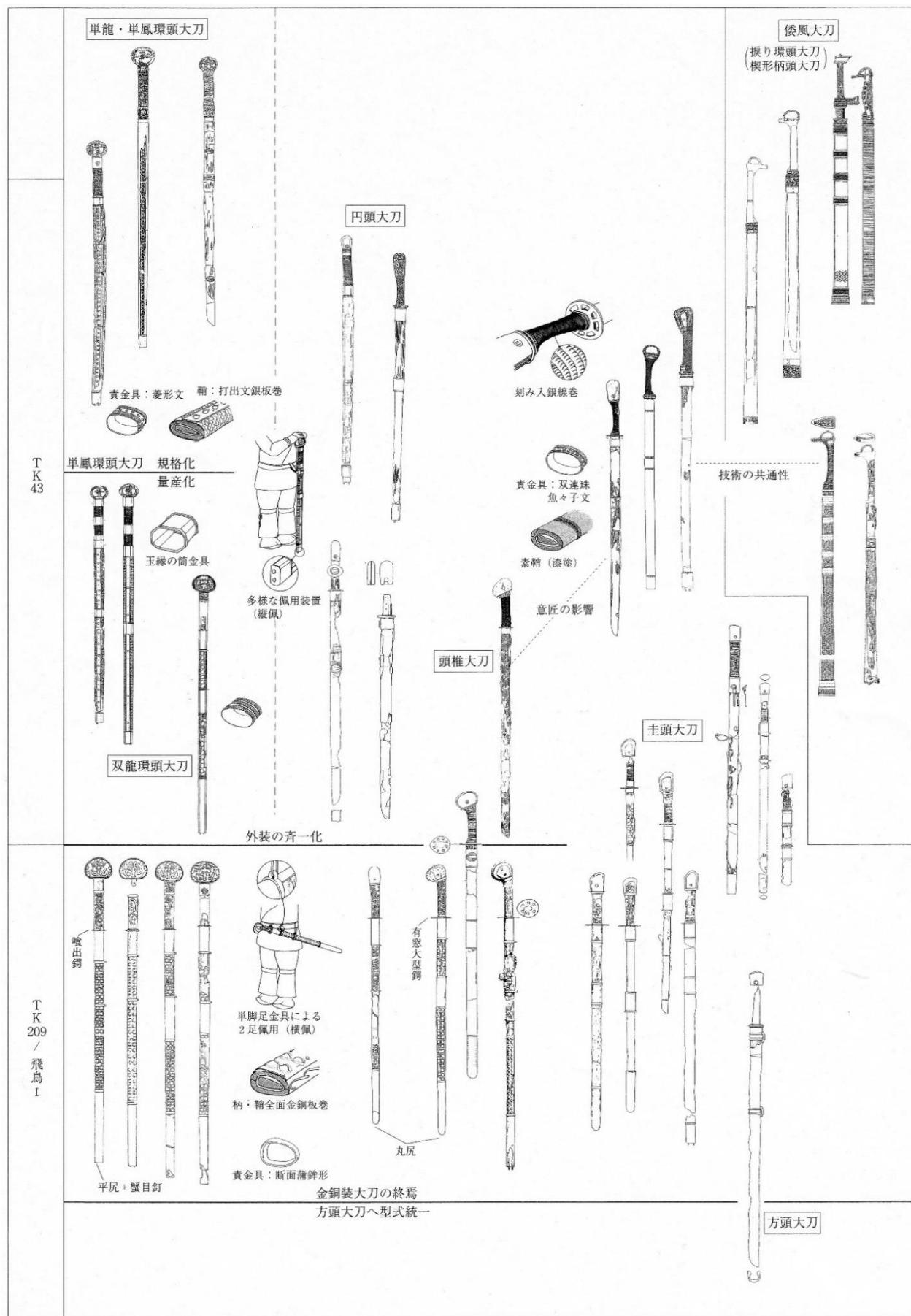


図3 装飾付大刀の型式と画期 (註7 P.177から転載)

## 5 資料の考察

今回報告した資料について若干の考察を行い、資料の時期や性格を考えてみたい。本稿では、台板に書かれた資料発見の経緯から、資料を一括資料として扱う。また、大刀・鍔・鞘装具（図2-1～6）は刃部の幅、鍔の内径、鞘装具の幅が概ね一致するため、一体の金銅装大刀と考える。

金銅装大刀の特徴を挙げると①金銅装であること、②大型有窓鍔を持つことの2点である。装飾付大刀の流れを概観すると、装飾付大刀は6世紀～7世紀初頭にかけて集中して存在し、6世紀末(TK209型式期)に主型式の全面金銅装化や鞘装具の佩表2列半球形打ち出し文への画一化が起こり、7世紀前葉に金銅装大刀が終焉を迎える（註7）。公民館の金銅装大刀もこの流れの中にあり、装飾には金銅装のみが見受けられる。

②の大型有窓鍔は上述の6世紀末の装飾付大刀の画一化に伴って、頭椎大刀・圭頭大刀と対応する特徴である。

上述の2つの特徴から公民館の装飾付大刀は、6世紀末～7世紀初頭の時期に属する。大型の六窓鍔との対応関係から柄頭は頭椎・圭頭が想定される。

次に、大刀片（図2-7）に丸石が取り込まれていることに着目したい。複数の石が取り込まれているが全て丸石であり、鑄生成時に周囲に丸石が多く存在していたことを示している。古墳である可能性を加味して考えれば、玄室床の丸石が推定される。

以上の考察から装飾付大刀と大刀片は、6世紀末～7世紀初頭の古墳に伴う副葬品と推定できる。

十文字槍は江戸時代のものと推定され、他の資料とはまったく時期が異なる資料である。『古京遺文』に登場する「小堂」や「放光寺址」に奉納されたものを想定しておきたい。

## 6 おわりに

本稿で報告した資料は、現在は下佐野第一公民館からかみつけの里博物館へ移管している。

本資料は保存処理が施されていないため、今後、保存処理を行う予定である。保存処理によって新たに判明することがあれば、追って報告したい。

下佐野第一公民館で大切に守られてきた資料は、佐野地域の歴史の一端を明らかにする重要な資料である。今回、報告した資料が活用され、佐野地域の歴史を明らかにしていく一端を担つてていくことを願っている。

最後に下佐野町第一町内会の砂賀晃区長ならびに下佐野町第一町内会の皆様には、資料の来歴についての調査、資料の移管等、多大なご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

註1 高崎市市史編さん委員会編1993『新編高崎市史』資料編1 原始古代

註2 犬谷稲斎纂1818『古京遺文』山崎知雄写本1842、東京大学デジタルアーカイブ、鷗A0 0:4019

註3 相川龍雄1937「末期古墳に就いて」『上毛文化』第2巻第11号、上毛文化会 相川達也編2008『相川龍雄 上毛考古学論考集』岩波ブックセンター収録

註4 松田登2001『下佐野町史』松田洋編、松田登

註5 群馬県編1938『上毛古墳総覧』群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第5輯、群馬県

註6 群馬県教育委員会事務局文化財保護課2017『群馬県古墳総覧』群馬県教育委員会

註7 松尾充晶2004「装飾付大刀」『考古資料大観』7 鉄・金銅製品、千賀久・村上泰通編、小学館、PP. 173-179